

大正期・臨時教育会議「女子教育」審議・

答申と与謝野晶子の女子教育論

——人間平等主義と男女共学制——

影 山 昇

目 次

はじめに	1 社会評論活動の展開
I 臨時教育会議の諮問と審議・ 答申・建議	2 教育の基本認識
1 臨時教育会議の発足と諮問 事項	3 日本の女子教育の流れ
2 諮問・審議・答申・建議	4 出生から第1歌集『みだれ 髪』出版まで
II 臨時教育会議「女子教育ニ関 スル件」の審議・答申	5 人間平等主義の徹底と男女 共学制の実現
1 「女子教育」審議の内容	IV 晶子の臨時教育会議「女子教 育ニ関スル件」審議・答申の批 判
2 第25回総会での答申	
III 与謝野晶子の女子教育論	むすび

はじめに

大正期の主だった教育改革はみな、臨時教育会議での審議を経た諸提案に基づいて推進されている。

そこで臨時教育会議の設置の経緯を辿ってみると、大正5年(1916)10月9日に寺内正毅内閣が成立し、かつて小松原英太郎文相(第二次桂太郎内閣)の下で文部次官をつとめた岡田良平が文相に就任し、小松原英太郎や平田東助らの献策を受け入れて、当面する教育課題解決に取り組み始めたのがまず端緒となった。

されば、従来の教育調査機関の所管を変更させ、内閣直属の強力な教育審議機関をつくり、元老や政府を動かして教育改革に必要な膨大な文教予算を確保し、教育に基づく国家百年の大計を樹立すべく、教育の諮問機関設置を岡田は、寺内首相につよく働きかけていった。

かくて寺内内閣では学制改革問題の解決をもって重要な使命の一つと決し、大正6年(1917)9月21日に教育調査会を廃止し改めて内閣直属の諮問機関である臨時教育会議を設け、平田東助を総裁に、久保田譲を副総裁とし、朝野の人材を網羅して委員に任じ、一気に学制改革断行を期したのである。

同年10月1日の臨時教育会議開会の冒頭、寺内首相は、

今回發布セラレタル臨時教育会議官制ハ中外ノ情勢ニ照ラシ国家ノ将来ニ稽ヘ教育制度ヲ審議シテ多年ノ懸案ヲ解決シ以テ学界ノ振興ヲ図リ給ハシムトスル(中略)教育ノ道多端ナリト雖国民教育ノ要ハ徳性ヲ涵養シ智識ヲ啓発シ身体ヲ強健ニシ以テ護國ノ精神ニ富メル忠良ナル臣民ヲ育成スルニ在リ実科教育ハ国家致富ノ淵源ニシテ国民教育ト竝ヒ奨メ空理ヲ避ケ実用ヲ尚ヒ帝国将来ノ実業経営ニ資セシメサルヘカラス高等教育ニ在リテハ専ラ学理ノ蘊奥ヲ究メ學術ノ進歩ヲ図リ以テ国家有用ノ人材ヲ養成スルヲ目的トス²⁾

と演説している。

臨時教育会議はその後、大正8年(1919)3月に至るまで、すなわち寺内内閣及び原敬内閣の二代にわたる間、教育制度全般の事項につき討議し、学制改革問題に対してその解決の方向を与えていくことになるのだが³⁾、与謝野晶子は特に諮問第6号「女子教育ニ関シ改善ヲ施スヘキモノナキカ若シ之アリトセハ其ノ要点及方法如何」の審議進行や答申自体に大きな関心を寄せている。そして雑誌『太陽』『中央公論』『早稲田文学』や新聞『横浜貿易新報』に積極的に自らの女子教育見解を精力的に発表している⁴⁾。

そこで本論考では、臨時教育会議で諮問され審議・答申された「女子教育ニ関スル件」に盛られた内容と、自らの教育観に立って審議・答申自体に手厳しい批判を加えた与謝野晶子の評論とを分析・検証し、批判の尺度となった晶子の女子教育に対する見方、考え方を明らかにする。

I 臨時教育會議の諮問と審議・答申・建議

1 臨時教育會議の発足と諮問事項

大正2年(1913)6月13日に設置された教育調査会の廃止を受け⁵⁾、大正6年(1917)9月21日に臨時教育會議が設置された。

制定された「臨時教育會議官制」によれば、この會議は「内閣總理大臣ノ監督ニ屬シ教育ニ關スル重要ノ事項ヲ調査審議ス」る機関で、首相の諮詢に應じて意見を開申し、首相もまた建議できるものとされた。

また會議の構成は總裁・副總裁各1名、委員は40名以内で、必要ある場合には臨時委員を置くことができることとなっていた⁶⁾。

總裁・平田東助(36番)、副總裁・久保田讓(23番)に続く各委員には、一木喜徳郎(1番・以下、各番号は職種議席番号)・鎌田栄吉(2番)・真野文二(3番)・山川健次郎(4番)・澤柳政太郎(5番)、以下、柴田家門(6番)・木場貞長(7番)・田所栄治(8番)・莊田平五郎(9番)・小松原英太郎(10番)・高木兼寛(11番)・阪谷芳郎(12番)・大津淳一郎(13番)・市来乙彦(14番)・山梨半造(15番)・早川千吉郎(16番)・成瀬仁蔵(17番)・瀬戸虎記(18番)・鶴澤総明(19番)・水野鍊太郎(20番)・有松英義(21番)・嘉納治五郎(22番)・北条時敬(24番)・下村延太郎(25番)・江木千之(26番)・関直彦(27番)・横田千之助(28番)・山根正次(29番)・三土忠造(30番)・水野直(31番)・小山健三(32番)・祭田熊蔵(33番)・古川公威(34番)・湯原元一(35番)・荒木寅三郎(37番)・井上友一(38番)・福原鐐二郎(39番)・上山満之進(40番)・平沼騏一郎(41番)・平沼淑郎(42番)といった面々で、ほかに吉田熊次・武部欣一・牧瀬五一郎・下条康麿の4名が幹事で田所委員が幹事長に就任している。

ついで總裁以下の主な現職をみると、小松原ら枢密顧問官3名、水野内務大臣、江木ら貴族院議員7名、大津ら衆議院議員4名、山川東京帝国大学総長ら帝国大学総長4名、嘉納東京高等師範学校長ら官立・私立専門学校及び高等学校長8名、帝国教育会会長の澤柳、莊田ら財界人3名、陸海軍軍人2名、田所文部次官ら官僚4名、井上東京府知事等といったところであった⁷⁾。

以下、具体的な諮問内容をみると、大正6年10月1日の開会初日にお

ける第1回総会での諮問第1号「小学教育ニ関シ改善ヲ施スヘキモノナキカ若シ之アリトスレハ其要点及方法如何」を最初として、大正7年(1918)12月24日の諮問第9号「学位ニ関スル制度ニ就キ改善ヲ施スヘキモノナキカ若シ之アリトセハ其ノ要点及方法如何」まで、小学教育・高等普通教育・大学教育及び専門教育・師範教育・視学制度・女子教育・実業教育・通俗教育・学位制度等、臨時教育会議は一々これら各諮問事項に対して審議を重ね答申を為し、希望事項が述べられ、その理由書も付され、相次ぎ答申されていた。

また諮問文そのものをみると、諮問9領域のすべてにおいて「改善ヲ施スヘキモノナキカ若シ之アリトセハ其要点及方法如何」という同一文章が付されており⁸⁾、岡田文相が、初めから政府案を作成して会議する形式を採らず、いわゆる白紙の状態のままで会議に臨み、委員側による教育改善策の自由な審議による答申案の作成に委ねていこうとしていたことがわかる。

こうして1年半にわたり臨時教育会議は審議を重ねたが、その際に各諮問領域単位に主査委員会が設けられ⁹⁾、主査委員会で審議結果を集約し、起草した答申案を総会でさらに審議・議決して「答申」とするといった運営方針がとられている。

2 諮問・審議・答申・建議

臨時教育会議の審議は一年半にわたって精力的にすすめられた。開催された回数をみると主査委員会が87回で、総会は30回にも達しており、諮問された9領域において12件の答申がなされている。このほか、「兵式体操振興」及び「教育ノ効果ヲ完カラシムヘキ一般施設」の2件の建議もあり、審議の進行経過は[表1]¹⁰⁾にみる通りである。

ところで、教育の全領域にわたる臨時教育会議の審議・答申の内容をみると、当然のことながら当時の世界の動向や日本の政治・経済・社会・文化の諸情勢をつよく反映している。

すなわち、日露戦争が終結した明治38年(1905)から加藤高明を首班とする護憲三派内閣によるさまざまな改革が行われた大正14年(1925)頃まで、わが国の政治や経済・社会・文化の各分野で民主主義的な傾向が認められたことは大正デモクラシーの風潮の影響がうかがえるからである。

表1 臨時教育会議の9領域諮問・答申・建議一覧

年月日	諮問・答申——（ ）内はそのおもな内容・建議
大正6年	
10月1日	諮問第1号「小学教育ニ関スル件」
10月25日	答申「小学教育」(1) (義務教育費国庫支弁)
12月6日	答申「小学教育」(2) (道德教育・教育方法改善, 教員改善, 視学機関, 補習教育, 義務教育年限)
5日	建議「兵式体操振興ニ関スル件」
7日	諮問第2号「高等普通教育ニ関スル件」
大正7年	
1月17日	答申「高等普通教育」(1) (高等学校制度)
5月1日	答申「小学教育」(3) (教科課程, 教科書, 入学準備教育, 学校と家庭・社会との連絡)
2日	答申「高等普通教育」(2) (教員の待遇, 国体觀念の徹底, 学科課程・教科書, 入学年齡, 課外読物の選択, 學術文芸の振興)
3日	諮問第3号「大学教育及専門教育ニ関スル件」
6月21日	諮問第4号「師範教育ニ関スル件」
〃	諮問第5号「視学制度ニ関スル件」
22日	答申「大学教育及専門教育」(分科大学制度, 予科制度, 設立主体, 専門学校制度)
7月24日	答申「師範教育」(師範学校: 予備科・教員待遇・生徒比率・給費・模範教科書・附属小学校, 高等師範学校, 文科大学教育学科, 教員検定制度)
25日	答申「視学制度」(中央, 地方)
9月17日	諮問第6号「女子教育ニ関スル件」
18日	諮問第7号「実業教育ニ関スル件」
10月24日	答申「女子教育」(目的, 高等女学校・実科高等女学校ノ規定改正, 専攻科, 教科目, 教員待遇, 実業教育)
25日	答申「実業教育」(制度, 振興方策, 道德教育, 行政組織, 実業補習教育の義務化, 教員待遇)
10月30日	諮問第8号「通俗教育ニ関スル件」
12月24日	答申「通俗教育」(行政組織整備, 出版, 図書館, 講演会, 興行物, 音楽, 体育施設)
〃	諮問第9号「学位制度ニ関スル件」
大正8年	
1月17日	建議「教育ノ効果ヲ完カラシムヘキ一般施設ニ関スル件」
3月28日	答申「学位制度」(授与者, 審査, 推薦制廃止)

しかしながら、臨時教育會議が発足した直後の大正6年(1917)10月23日、ボリシェビキ党中央委員会(レーニン出席)が武装蜂起の方針を決定し、同年11月7日(露暦では10月25日)にはペトログラードでボルシェビキが武装蜂起してケレンスキー政府が転覆、ソビエト政權樹立が宣言(ロシア10月革命)されたいわゆるソビエト革命の臨時教育會議での審議への影響はきわめて大きく¹¹⁾、小学校から大学まですべての学校教育段階で国体觀念の涵養の重要性が答申中で強調されている。

また臨時教育會議でなされた答申中で全面的に政策として実施されたものは、諮問第1号の第1回答申(→「市町村義務教育費国庫負担法」として答申実現)、諮問第2号の第1回答申(→「高等学校令」として答申実現)、諮問第3号の答申(→「大学令」として政策化実現)及び諮問第9号の答申(→「学位令」として政策化実現)の4件であった。

このほか、全面的ではなかったものの、諮問第1号の第2回答申、諮問第6号「女子教育ニ関スル件」及び第7号答申「実業教育ニ関スル件」(→特に「女子教育」に関連するもの)は50%以上の項目が実施に移されている。

さらに先送りされ、後に設置をみた文教審議會*での審議を経て実施されたものは、諮問第1号の第3回答申中の高等小学校の教科目や教科書制度等の改革、諮問第4号の答申中の師範学校制度の改革や「兵式体操振興ニ関スル建議」があり、特に兵式体操振興の件は江木・大津・鎌田・関ら7名を提案者とし、学校教育における兵式体操を充実させて徳育を裨補し、体育に資することは緊急の要務であるから、すみやかに措置を講ずるように求めたものであった¹²⁾。

なお臨時教育會議の答申でまったく実施につながらなかったものが諮問第5号であったこともここに付記しておく。

* 文政審議會は、大正13年(1924)4月15日、清浦奎吾内閣(同年1月7日、清浦内閣成立)下の江木千之文相が、思想善導・精神作興運動推進方針を明らかにし、その方策実現のための權威ある恒久的機関、それも内閣直屬の諮問機関として発足させたものである。なお文政審議會はその後、昭和10年(1935)12月まで、実に11年、9代にわたる内閣の下で存続している¹³⁾。

Ⅱ 臨時教育会議「女子教育ニ関スル件」の審議・答申

1 「女子教育」審議の内容

臨時教育会議の総会での審議回数は30回に及んでいるが、その審議経過は〔表2〕¹⁴⁾にみる通りである。

表2 総会での審議経過一覧

回数	日付	審議および議決案件
1	大正6年10月1日	諮問第1号(小学教育)審議
2	10・3	同上
3	10・4	同上
4	10・6	同上
5	10・25	諮問第1号第1回答申議決
6	10・27	「兵式体操振興ニ関スル建議」案審議
7	11・1	「高等教育機関増設ニ関スル建議」案審議
8	12・5	「兵式体操振興ニ関スル建議」議決(「高等教育機関増設ニ関スル建議」案は澤柳政太郎の要請で撤回される)
9	12・6	諮問第1号第2回答申議決
10	12・7	諮問第2号(高等普通教育)審議
11	12・8	同上
12	大正7年1月16日	同上
13	1・17	諮問第2号第1回答申議決
14	5・1	諮問第1号第3回答申議決
15	5・2	諮問第2号第2回答申議決
16	5・3	諮問第3号(大学教育及専門教育)審議
17	6・21	同上。諮問第4号(師範教育)および諮問第5号(視学制度)提出
18	6・22	諮問第3号答申議決
19	6・23	諮問第4号(師範教育)審議
20	6・25	同上、および諮問第5号(視学制度)審議
21	7・24	諮問第4号答申議決
22	7・25	諮問第5号答申議決
23	9・17	諮問第6号(女子教育)審議
24	9・18	諮問第7号(実業教育)審議
25	10・24	諮問第6号答申議決
26	10・25	諮問第7号答申議決
27	10・30	諮問第8号(通俗教育)および「人心ノ帰嚮統一ニ関スル建議」案審議
28	12・24	諮問第8号答申議決
29	大正8年1月17日	諮問第9号(学位制度)審議、および「教育ノ効果ヲ完カラシムヘキ一般施設ニ関スル建議」(「人心ノ帰嚮統一ニ関スル建議」を改称)議決
30	3・28	諮問第9号答申議決、全審議終結

ところで臨時教育会議の諮問第6号「女子教育ニ関スル件」が審議されたのは大正7年(1918)9月17日の第23回総会で、その後の同年9月21・25・27・30各日の4回にわたり主査委員会が開かれており、同年10月24日に答申及び答申理由書が第25回総会で議決されている¹⁵⁾。

そこで以下では女子教育に関する一連の審議内容を、第23・25両回の総会「速記録」を中心にしてみることにする¹⁶⁾。

すなわち、討議された中心課題は高等女学校の教育内容改善と女子高等教育に関する問題であった。

まず第23回総会「速記録・第23号」によれば冒頭で岡田文相は、

今日ノ制度ノ高等女学校ト云フモノヲ以テ女子教育、先ヅオシマイトスル、其外ニ女子ノ専門学校ト云フヤウナモノモゴザイマスルケレドモ、是ハ極メテ其設立モ少イコトデゴザイマシテ、一般ノ先ヅ教育制度トシテハ高等女学校デ女子教育ノオシマイト云フ形ニナツテ居リマスガ、是ハ果シテ当ヲ得テ居ルモノナリヤ否ヤ、今少シ此程度ヲ高メタ方ガ宜イデヤナイカト云フヤウナ説モアリ、又ソレニハ及バズ今日ノ儘デ宜イト云フヤウナ説モアリマスルノデ、此辺ハ十分御審議ヲ願ヒタイ点ト考ヘテ居ルノデアリマス、又高等女学校ニ於キマシテ、実科高等女学校ト云フモノト、普通ノ高等女学校ト云フモノト二通りゴザイマスガ、是等ノ関係ニ付テ多少變更イタシタ方ガ宜クナイカト云フヤウナ説モ往々聞ク所デアリマス、是等モ亦今回ノ会議ニ於キマシテ御討究ヲ願ヒタイト思ツテ居リマスル点デゴザイマス、

と審議課題と討究内容をまず女子中等教育に絞るよう提起している。

ついで成瀬仁蔵委員(17番)が著書『女子教育改善意見』中の「我が帝国ハ今後如何ナル女子大学ヲ要スルヤ」「女子教育改善策」の両章の小冊子を出席委員に配付して、女子大学設立の必要性や女子教育全般にわたる改善策を提示している。

成瀬委員の主張は、

其ノ主義ノ極大体ヲ申上ゲマスルト、女子ノ天性、稟賦ノ傾向ト特性ヲ研究シテ、女子ハ本能的ニ人類ノ獲得セル後天的善ヲ保存シ、

更ニ一般ノ高処ニ於テ新シキ善ノ要素ヲ増加シテ社会国家ヲ向上セントスル資質ヲ有スル者デアリマスルカラ、此見地カラ我国ノ女子ハ其本分責務トシテ我国ノ家族制度ノ真髓、国民性ノ美質及ビ博愛、仁愛、婦人ノ本領ヲ保全シ男子ノ及バザル所ヲ補フテ西洋文明ノ長所ヲ同化シ、東洋文明ノ復興ノ使命ヲ荷フ者デアル、

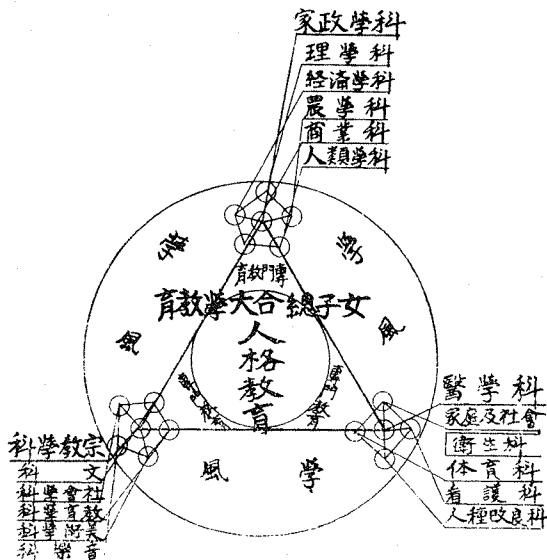
とし、国情を踏まえ、[図1]にみる「女子総合大学教育」構想を示しながら、女子大学の中心学科として「家政学科」「宗教科」「医学科」を設置、以下順次他に及ぼしていく方針が望ましいと主張する。

続いて女子教育改善のための初等教育から起こした10ヶ条に及ぶ実行意見を資料として提出している。

①「国民教育ノ徹底」②「国民教育ト補習教育」③「女子普通教育ノ徹底的統一」④「高等女学校」⑤「女子高等学校」⑥「女子専門学校」⑦「女子大学」⑧「女性人格教育ノ徹底」⑨「女子ノ体育ノ徹底」⑩「女子視学」、以上①～⑩である。

この成瀬委員の後を受け、嘉納治五郎委員（22番）が続いて発言して

図1 成瀬仁蔵の「女子総合大学教育」構想



いる。

私ハ女子ノ教育ノ中デ母ノ務メトスルコトニ最モ重キヲ置ク必要ガアラフト思ヒマス、(中略) 今日我国ニ於テ家庭教育社会教育ノ大切ナルコトハ尋常一様ノ事デナカラウト思ヒマス、其家庭教育、社会教育ノ改善ヲスルト云フコトニ付テ女子ノ為スベキ所ガ甚ダ多イト信ズルノデアリマス、

とて、国民道徳の後退という現状を踏まえ、その改善のためには家庭教育・社会教育が重要であり、母となる女子教育の最重要なることをまず説いている。ついで女子教育全般において、ともすれば「女子ノ家政上ノ実用上ノコト、裁縫トカ、割烹等ニ殊ニ比較的重キヲ置イテ其女子ノ精神教育ヲスルト云フコトニ付テハ比較的力量ガ這入ツテ居ラナイト思フ」ということで、その天職を喜んで遂行する精神教育と、これを考究する場としての女子大学の設置はやはり必要ではないかと述べている。

ただ成瀬委員が指摘した「文科ハ宗教的ナモノニスルト云フコトハ私ハ了解ガ出来ヌ」とし、

女子ニ偶サカ理科ニ優レタ者ガ出来、文科ニ優レタ者ガ出来テモ、是ハ男子ノ殊ニ専門ノ学門^(マツ)ヲスルヤウナ者ニスル、是ハ私ハ今日モ東北大学ノ如ク女子ヲシテ男子ト同ジヤウニ学ニ就カシムル途ガ開ケテ居ルノデアリマス、サウ云フヤウニ女子ノ為ニモ男子大学ニ入レル途ガ開ケテ居レバソレデ宜イ、女子ハ女子ニフサハシイ高等学校ヲ拵ヘルト云フコトガ必要デアル、是ハドウカ政府ニ於テモ今日高等女学校以上ハ高等女学校ノ専門科ト云フ位ナモノデナク、ソレ以上ノ学校ノ設立ヲ希望スル、

と述べており、嘉納委員の女子高等教育構想はなかなか現実的である。

ついで井上友一委員(38番)が起ち、第1点としては「女子教育ノ補習教育トシテ小学ヲ卒ツタ者ニ施シテ居ルモノノ少イコトハ甚ダ遺憾トシテ居ル」ので、「是非ハ後日時ガ来タナラバ義務制度ニスルコトニ文部省ガ制定セラレンコトヲ望」むと述べ、第2点としては高等女学校の一層の徹底を図るとともに、「高等女学校ヲ卒ツテ直チニ家庭ニ入ル

人ニハ尚ヲ不十分デアル」ので「学科ヲ伸縮自在ニスルコトガ地方官ノ希望スル」ところであるとしている。さらに第3点として、「実科」高等女学校と「実科」が頭につくと「第二流ノ高等女学校デアルガ如キ感ヲ為ス」ので、この際、「実科ト云フコトノ字ヲ掲ゲルト云フコトハ無用ト思ヒマス」と提言し、委員会においてこの件については十分討議して欲しいと要望している。

ところが江木千之委員（26番）は、自ら信ずる中国儒家の女誡を引用し、この頃の女子教育はどうも「幽閑貞静ニシテ節ヲ守ルト云フコトノ教育」が欠けており、「女子ヲシテ男子ト似寄ツタヤウナ学問ヲ多クヤラスト云フコトハ私ハ甚ダ不賛成デアル」と女子高等教育にきわめて消極的な見解を開陳しており、最終的には高等女学校の教育では「婦徳ヲ養成スルコトヲ目的トシテ改良セラレ」、これらの点について主査委員会で十分に検討して欲しい旨、要望して江木委員は発言を終えている。

この江木委員の発言に同感であるとして関直彦委員（27番）も発言を求めているが、関委員の考えは、「今日ノ時勢、女子ノ思想状態ニ就キマシテハ頗ル危険ナル如ク婦人ノ思想ヲ見マシテモ今日ハ最モ危険ナル状態ニ流レツ、アルヤウニ考ヘルノデアリマス」という現実認識に立脚して、以下のような対応策を講ずべきことを提言している。

最モ力ヲ用ヒテ貫ヒタイノハ道德的ノ信念ヲ与ヘルコト、或ハ宗教的ノ信念ヲ与ヘルコト、竝ニ主トシテ国民的道德ノ信念ヲ深く注入シテ、斯ル危険ナル思想ノ流レニ対シテ最モ意ヲ此辺ニ用ヒテ教師タル者ハ即チ生徒ヲ教授シテ貫ヒタイ、殊ニ其淵源トモナル所ノ女子高等師範学校等ニ於キマシテハ、先程嘉納委員ノ言ハレマシタル通り全然私ハ同意イタス次第デアリマスカラ、其ノ点ハ現代ノ思想ノ変化アル時代ニ処シテ其道ヲ誤ラナイト云フコトニ当局者ハ最モ深く注意ヲ払ハレムコトヲ偏ニ希望スル次第デアリマス

さらに鵜澤総明委員（19番）も以下のような発言を付け加える。

日本ノ女子ト致シテ「賢母良妻ハ固ヨリ結構デアリマセウガ、之ト同時ニ日本ノ国ニ於ケルーツノ婦人デアル、即チ日本ノ国ニ対スル所ノ正シイ一個ノ女デアルト云フヤウナ女子ノ教育ト云フモノヲシ

ナケレバ、ドウシテモ此今日ノ思想界ノ圧迫シテ参リマス所ノ者ニ
対シテ対抗スルコトガ余程困難デアラウト思フノデアリマス、

こうした論議を重ねた後、平田東助議長は「澤柳委員・小松原委員・
阪谷委員・成瀬委員・江木委員・関委員・三土委員、三十一番ノ水野委
員・湯浅委員」の9名に主査委員を依頼し、この件は主査委員会でのさ
らなる審議へと付託されることになったのである。

2 第25回総会での答申

主査委員会は小松原委員を座長として大正7年(1918)9月21・25・
27・30各日の合計4回にわたり開かれ、「女子教育ニ関スル件」が討議
され、同年10月24日の第25回総会へ、主査委員会が作成した答申案と答
申理由書とが提出された。

まず主査委員会での審議の様子は小松原委員長は説明しているが、
「制度」「内容」両面から議論を重ねたという。

制度問題トシテハ、女子大学ノ設立ヲ要スベキヤ否ヤ、高等学校ノ
程度ニ対応スベキ女子教育機関ノ特設ヲ認ムベキヤ否ヤ、又高等女
学校ノ修業年限、学科課程等ヲ如何ニ改善スベキカ、実科高等女学
校ノ名称ヲ廃シ、総テ高等女学校トナシ、高等女学校ノ学科目ヲ改
善シテ実科ノ教育ニ重キヲ置キ一層實際生活ニ適切ナラシムルモノ
トナスベキヤ否ヤト云フ是等ノ問題ニ就テ審議ヲ尽シ、又内容問題
トシテハ女子教育ノ目的及ビ現在ノ欠陥等ニ関シマシテ考究ヲ致
シ、其他学校職員待遇問題、校長若クハ視学機関等ニ女子ヲ登庸ス
ル等ノ問題ニ互リマシテ詳細ニ考究ヲ尽シタノデアリマス¹⁷⁾、

ところで主査委員会で大いに議論された審議は女子の高等教育の問題
であった。

小松原によれば意見は3種に分れたという。

- ① 「女子教育ニ関スル制度ハ大体ニ於テ現制ヲ以テ足ルモノトス
ル、改正ノ必要ハナイ、而シテ高等女学校ヲ卒業シタル者ニシテ、
更ニ進ンデ高等ナル教育ヲ受ケントスル者ノ為ニ今日ノ専攻科ヲ改

良スレバ別ニ高等女学校以上ノ学校ヲ特設セズトモ教育ヲ完成サセルコトガ出来ル、若シ各種専門ノ學術ヲ履修セントスル大学ノ教育ニ至ッテハ大学ニ於テ之ヲ研究スルノ途ヲ開イテ、男女共学ヲ執ッテ宜シイ」

② 「我国ノ女子ニシテ高等女学校ノ卒業ヲ以テ満足セズ、更ニ高等ノ教育ヲ受ケントスル者ガ近時益々増加ノ勢ヒヲ致シタニ拘ラズ、我国ニ適當ノ教育機関ガ備ハッテ居ナイガ為ニ、往々海外ニ遊学ヲセザルベカラザルノ已ムヲ得ザルニ至ル、故ニ今日ハ宜シク我国ニ於テ女子ノ大学制度ヲ設ケ、是ガ機関ノ設備ヲ認ム件デアラウ、而シテ女子ハ男子ト其性情ヲ異ニシテ居リマスルガ故ニ、男女共学ノ制度ハ宜シクナイ、宜シク女子ノ為ニ特ニ大学ヲ設ケルコトニスルガ宜シイ」

③ 「女子教育上ノ激変ハ女子ノ生理状態ニ悪影響ヲ及ボス憂ガアル、過重ノ学科ヲ課スル為ニ、其教育上ノ圧迫等ガ女子ノ体力ノ発達ヲ中止シ、女子ノ死亡率ヲ増加シ、妊娠率ヲ減少スルニ至ル虞レガアル、我国女子ノ死亡率ハ近年著シク増加シテ居ルヤウニ思ハレル其原因ハ果シテ何レニアルカ、若シ教育ノ激変ニ是ガ関係ヲ有スルモノトスレバ、女子高等教育ノ圧迫ハ民族ノ将来ニ大ナル危険ヲ及ボスノ虞ガアルカラシテ、高等女学校ノ上ニ更ニ高等ナル教育機関ヲ設ケルト云フコトハ絶対ニ宜シクナイ」

しかして主査委員会での最終的な結論は下記の「答申理由書」中にある如く、①の意見が採用された。

女子ニシテ専門ノ學術ヲ修メントスル者ニ関シテハ既ニ東北帝国大学等ニ於テ実施セル如ク女子高等師範学校等ノ卒業生ニシテ大学ニ於テ高等学校卒業生ト同等以上ノ学力アリト認メタル場合ニ於テハ之カ入学ヲ許可スルノ途ヲ開キテ然ルヘシ然レトモ特ニ女子ノ為ニスル大学ノ制度ヲ立ツルカ如キハ未タ其ノ時期ニアラスト認ム蓋シ女子ノ専門學術教育ニ付テハ今日尚試験ノ時代ニ属ス殊ニ女子ノ為ニ特殊ノ大学制度ヲ設ケムトスルカ如キハ其ノ制度ニ関シテモ尚十分ノ研究ヲ要スヘシ

さらに「理由書」では以下のように付言されている。

今日ハ高等女学校ニ高等科ヲ設クルコトヲ得シメ之ニ依テ一層高等ノ教育ヲ授ケ之ヲ以テ女子ノ高等教育ヲ完成セシムヘシ而シテ更ニ専門學術ヲ修メムトスル特種ノ志望者ハ大学ニ入りテ之ヲ研究スルヲ得ルノ途アルモ尚女子ノ為ニ専門學術ヲ教授スヘキ高等ノ学校ヲ設ケムトスル者アラハ亦其ノ途ヲ杜絶スヘキニアラス而シテ現行専門学校令ニ依レハ此種ノ学校ヲ設クルニ何等支障アルコトナク専門学校令ニ依拠シ女子ノ為ニ學術ノ蘊奥ヲ攻究スヘキ大学ノ實質ヲ具フル教育ヲ授クルモ亦可能ナルカ故ニ之ニ依リテ其ノ経営ノ歩ヲ進メテ可ナリ当局者ニ於テハ須ク女子高等教育ノ穩健ナル発達ヲ為サシムルニ適當ナル措置ヲ取ルヘキナリ

ちなみに②の意見は成瀬や澤柳両委員の主張と思われ、③は「(総会)速記録」によれば山川健次郎(4番)・江木両委員であることがわかる。特に江木委員の総会での発言すなわち「婦人ハ智力ガ足ラナイ為デハナイガ其自然ノ素質ガ他ノ方面ニ向フガ為ニ、骨ノ折レル研究や職業上ノ研究ヲ十分ニヤリコナスト云フ者ガ少ナイ、之ヲ十分ニヤリコナス者ハ婦人的素質ヲ欠イテ居ル者デアル、(中略)立派ナ學問ガ出来ル女ハ女ノ中ノ変リ者デアル」の底流には、母性としての女性を強調し、男性と同様に女性も独立した人格を備えた発達可能性を内在する人間としての尊厳を有する女性という大正デモクラシーの潮流を受けての女性認識の向上を妨げるばかりか、将来の国民を生み出すという国家目的を最優先させ、女性を高等職業教育や専門教育というまでもなく、高等普通教育の機会をも排除しようとする意図もうかがえる。

いずれにしても、諮問第6号「女子教育ニ関スル件」の原敬首相への以下にみる答申案は、大正7年10月24日の第25回総会で議決されている。

一、女子教育ニ於テハ教育ニ関スル勅語ノ聖旨ヲ十分ニ体得セシメ殊ニ国体ノ觀念ヲ鞏固ニシ淑徳節操ヲ重ンスルノ精神ヲ涵養シ一層体育ヲ励ミ勤勞ヲ尚フノ氣風ヲ振作シ虚榮ヲ戒メ奢侈ヲ慎ミ以テ我家族制度ニ適スル、素養ヲ与フルニ主力ヲ注クコト

- 二、高等女学校ニ於テハ實際生活ニ適切ナル知識能力ノ養成ニ努メ且ツ經濟衛生ノ思想ヲ涵養シ特ニ家事ノ基礎タルヘキ理科ノ教授ニ一層重キヲ置クコト
 - 三、高等女学校及実科高等女学校ノ入学年齡修業年限学科課程等ニ関スル規定ヲ改正シテ一層地方ノ情況ニ適切ナラシムルコト
 - 四、高等女学校卒業後更ニ高等ナル教育ヲ受ケムトスル者ノ為ニハ専攻科ノ施設ヲ完備シ又必要ニ応シテ高等科ヲ設置スルコトヲ得シムルコト
 - 五、高等女学校ノ教科目ハ成ルヘク選択ノ範圍ヲ広クシ最モ適切ナル教育ヲ施スコト
 - 六、高等女学校長並教員ノ待遇ヲ高メ優良ナル人物ヲ招致スルコト
 - 七、女子ニ適切ナル実業教育ヲ奨励スルコト
 - 八、以上ノ外高等普通教育改善ニ関スル第二回ノ答申ニ列挙シタル事項ハ大体ニ於テ女子教育ニ関シテモ同様必要アルモノト認ム
- 希望事項
- 女学校ノ校長及視學委員ニハ學識經驗ニ富メル適良ノ女子ヲモ任用スルノ途ヲ講セラレムコトヲ望ム

Ⅲ 与謝野晶子の女子教育論

1 社会評論活動の展開

与謝野晶子（以下「晶子」と略す）といえは第1歌集『みだれ髪』（明治34年）を發表し、近代短歌革新の烽火をあげた歌人として著名であり、『源氏物語』を3度も現代語訳したすぐれた国文学者でもあった。

しかしながら、晶子は歌人としてばかりではなく明治末期から大正・昭和初期にかけて数多くの評論を發表し続けた女性評論家（オピニオン・リーダー）としての一面でも才能を發揮している。しかも彼女の理論的枠組みは、明治44年（1911）7月に金尾文淵堂から出版された最初の評論集『一隅より』に収められている評論「婦人と思想」を一読すると、この時点ですでにほぼ出来上っていることがわかる。

すなわち、この評論には「行ふと云ふこと、働くと云ふことは器械的である。従属的である。其れ自身に価値を有つてゐない事である。わた

しは人に於て最も貴いものは想ふこと、考へることであると信じてゐる」とあり¹⁸⁾、論旨はさらに以下のように展開されていく。

(前略) 又日露の大戦争に於て敵味方とも多くの生霊と財力とを失つたと云ふ如き目前の大事実に就ても、日本の男子は唯その勝利を見て、かの戦争に如何なる意識があつたか、如何なる効果をかの戦争の犠牲に由つて持ち來したか、戦争の名は如何様に美しくかつたにせよ、眞実を云へば世界の文明の中心思想に縁遠い野蛮性の發揮では無かつたか、と云ふ様な細心の反省と批判とを徐ろに考へる人は少いのである¹⁹⁾。

されば、思想言論の自由が許されている今日、各個人が自己の権利を正当に行使しなければ文明人としての心掛けに背くことになるのではないかと主張する。

さらに晶子の主張は久しく考えることを放棄してきた一般の女性に「思想」のもつ大切さを訴え、これまで女性が男性より輕侮され従属者扱いを受けてきたのは、女性がただ手足のみを器械的に働かせて頭腦を働かせようとしなかったからであるとも説いている。

あわせ「婦人解放」の問題についても言及している。

すなわち、近年婦人問題が問われているが、それは女性側から言い出したものでなく、特に男子側から御慈悲をかけて御世辞半分に言い出されている問題である。そればかりか近頃はこの問題の反動として、「女子に高等教育は不必要だ、手芸教育が必要だ、女子は柔順に教育しなければならぬ」と唱えられ始め、例の保守的思想が跋扈している。やはり女性自身が、目を覚まし、自己を改造して婦人問題の解決者として、まず想う婦人、考える婦人、頭腦の婦人となり、兼ねて働く婦人、行かう婦人、手の婦人となることが急務であるとも述べている²⁰⁾。

つまり、女性解放は女性自身が目覚め、問題を男性の識者に委ねることなく、女性が自らの手で取り組み、解決していかなければならないのであるというのが晶子の考えであつた。

ところで、晶子のこの評論が発表された明治44年という年には平塚らいてうの雑誌『青鞥』が創刊されており、晶子も巻頭を飾る「山の動く日來る」で始まる「そぞろごと」という短詩を寄せている²¹⁾。

この『青鞥』の創刊はまさに女性史の新しい時代の幕明けとなるものであるが、「本社は女子の覚醒を促し、各自の天賦の特性を発揮せしめ、他日女流の天才を生まんことを目的とす」（青鞥社規約・第1条）という青鞥社という結社自体には晶子は深く入らず、翌45年（1912）5月5日、7人の子どもを夫・寛の妹・静にまかせてヨーロッパに旅立っていった²²⁾。

晶子のヨーロッパ滞在は5ヵ月に及ぶが、パリを足場にヨーロッパ各地を歩き、多くの衝撃を受け、それまで日本の伝統的な芸術（短歌）や日本の古典（その筆頭は『源氏物語』）の世界に生きていた晶子にとっては、ヨーロッパでの日々の生活が世界に大きく目を開いていく学習の連続であり、やがては改めて自分が世界の広場にいる一人の日本の女性であるとつよく自覚するまでになった。

ヨーロッパの女性がみな静止的な東洋の女性と対照的に自由に活動している有様をみて、「自分は日本の女の多くを急いで活動的にしたい」²³⁾と強く願い、イギリスでは女子教育の普及と婦人参政権問題が沸騰している状況を目撃して、これもイギリスでは「女子教育が普及した結果内面的に思索する女が多数に成つた」²⁴⁾ことによるものと考えたりする晶子であった。ここにおいて晶子は「世界が憧憬の対象から現実的存在へと変化すると同時に、日本が客観的な対象と化すという、いわばある種の視座転換を体験」²⁵⁾する。

そして帰国後の晶子を見ると、一児を産んだ後、長編小説『明るみへ』を『東京朝日新聞』（大正2年6月5日～9月17日）に100回連載、第8詩歌集『夏より秋へ』（大正3年1月）を出版、さらにヨーロッパ紀行文集『巴里より』（同年5月）を夫・寛と共著で刊行する等、きわめて精力的に仕事を積み重ねている²⁶⁾。

さらに自らの理論の枠組みをも深め、やがて本格的な評論活動を晶子が開始するのは、雑誌『太陽』常設欄「婦人界評論」に毎月執筆し出す大正4年（1915）1月以降のことで、ほかに『女学世界』（大正5年5月以降）や『横浜貿易新報』（同年9月以降）へと評論発表の場は次第に広がっていく²⁷⁾。

こうしてその後の晶子は以下に見るような15冊もの所感・評論集を相次ぎ刊行していくのである。

- ① 『一隅より』 金尾文淵堂・明治44年7月
- ② 『雑記帳』 金尾文淵堂・大正4年5月
- ③ 『人及び女として』 天弦堂書房・大正5年4月
- ④ 『我等何を求むるか』 天弦堂書房・大正6年1月
- ⑤ 『愛、理性及び勇氣』 阿蘭陀書房・大正6年10月
- ⑥ 『若き友へ』 白水社・大正7年5月
- ⑦ 『心頭雜草』 天佑社・大正8年1月
- ⑧ 『激動の中を行く』 アルス・大正8年8月
- ⑨ 『女人創造』 白水社・大正9年5月
- ⑩ 『人間礼拝』 天佑社・大正10年3月
- ⑪ 『愛の創作』 アルス・大正12年4月
- ⑫ 『砂に書く』 アルス・大正14年7月
- ⑬ 『光る雪』 実業之日本社・昭和3年7月
- ⑭ 『街頭に送る』 日本雄弁会講談社・昭和6年2月
- ⑮ 『優勝者となれ』 天来書房・昭和9年2月²⁸⁾

2 教育の基本認識

晶子の教育に対する基本的な考えをさぐると、「学制の整齐でも、学科の該博かくはくでもない、人の子をして如何に自らの生存欲を聡明に批判し、自由に充実し、幸福に延長すべきかと云ふ自覚と実行力を内発せしめる機勢はすみ しげきと刺戟とを与へるものでなければならぬ」²⁹⁾との理解を前提として、教育の唯一の目的は「個人が本然に持つて居る生の本能を人為的に刺戟して、其人自身の生に必要なあらゆる力を内から開発させること」³⁰⁾にあるとしており、このことが彼女の教育認識の基本となっている。

ついで、内発的な発達可能性(→「素質」)の伸長と「境遇」(→「環境」)という外的条件との相互の関連性についても言及する。

素質と云ふ中にも、精力と云ふか、活力と云ふか生の意欲と云ふか、兎に角心の内部に潜む或る動力の旺盛なものと然らぬとが人の一生に大きな関係を持つ。(中略)唯だ余りに呑気な上流と、余りに貧窮した下層社会とから、不良な人間を出す例が多いのは、境遇の素質を悪化するものらしい³¹⁾。

ここにおいて、独立した一個の人格を備えた存在としての子供観が加わっていく。「子供は同じ愛情の中に育てることは出来ても、同じ方則の下に育てることは出来」³²⁾ぬ、いずれにしても「既に別個の人格を持って独立して居るものである」³³⁾から、「学校教育の画一的であることは多勢を一堂に集めて教育する組織の上から已むを得ないことですが、家庭での教育は学校教育の欠点を補正して、出来るだけ個別的であることを必要と」³⁴⁾するものであるという個性重視の教育を提唱し、さらに以下のような考察が続く。

たとへば人間の平等を曲解して、何人にも画一教育を施したり、また母性を誇大視して、すべての女子に母性偏重の生活を強制したりする様なことが其れです。人間の能力は万能的に平等ではあり得ないのでですから、個人個人の特長に即した個別的の教育を施さねばならず、(中略)愛と理性とが並んで発達して居る人にあつては、自他の個性を平等に尊重すると共に、他人に難きを強ひる事なく、他人の長所を讃美し、他人の短所を恕さうとします。自己に共鳴しない所があるからと云つて、決して他人を侮蔑するやうな事をしません³⁵⁾。

事実、11名の子供の母であつた晶子の「我子の教育」という評論中には自らの育児体験を踏まえた、誘導と奨励と助成を指導原則とする教育記録を書き残している。

一人一人に性格が異つてゐるので、或子には余計に忠告し、或子には寛大にすると云ふ類の手加減は勿論必要である。画一教育は家庭に於ても避けねばならない。私は早熟の子には三歳から仮名を教へてゐるが、子供は少しも苦にせずはずんずんと覚えてゐる。反対に能力の発動の遅い子には学校の教育以外に多く物を教へずゐる³⁶⁾。

必然的に、明治以来のわが国の伝統的な画一的学校教育はそのまま晶子の批判の対象となる。

能力の發育には遅速があつて必ずしも均一に芽をふくとは限らない。(中略)しかるに小学や中学での優良な成績を挙げないからといつて、周囲から輕視し、引いて本人をして自暴自棄的な心持を抱かせるのは、明治以来の画一教育の冷酷な点である³⁷⁾。

学校教育に対する晶子の批判は続く。

学校教育で今のような中等程度の煩瑣な多くの学課目を、生徒の素質の適不適に関はらず一律に必ず授けねばならぬと決めてゐる事などは、余りに御規則通りである。之がためにどれだけ学校も生徒も無駄をしてゐるか知れない³⁸⁾。

こうして、晶子の辿りついた教育は他に妄從せぬ自己の確立と個性の並存する人間社会の実現を目指すことになる。

従來の私は余りに人類世界の統一を空想して居たのです。世界が一つの楽律で調和し得るもののやうに考へて居たのです。併し個性自律の生活が正しいとされる現代では、或点で各人が小さな集団に分裂して互に異を立てながら並存するのが当然でないでせうか³⁹⁾。

こうして異なる集団の相互理解と協力を求めながらも、教育の理想を高く掲げた晶子であつたのだが、現実の当時の日本の教育は余りにも女性には不当極まりないまでの差別が深くまで根を下ろしていた。

それだけに女性に対する教育上の差別は何としても撤廢されなければならないと受け止め、人間平等主義に立つ男女共学と教育の機会均等の実現を晶子がつよく要求していくのは必然のことであつた。

私達は何よりも教育の活動を自由にするために、男女の共学を学校教育の全領域に向つて要求します。私達は女子なるが故に人間としての完全なる教育を拒まれる理由は断じて無いと思ひます。(中略)私達は男女の性別を考へずに、一切の教育に機会の均等を得たいと思ひます。中学程度以上の教育を許さずに於て、女子の素質を批判される事は遺憾千万です⁴⁰⁾。

3 日本の女子教育の流れ

江戸期の女子教育はおおかた家庭で行なわれたが身分により若干の相違はあった。

だが共通していた教育方針は、儒教主義に基づく「三従」（家庭にあっては両親に、嫁としては夫に、老いては子に従う）と「四行」（婦徳・婦言・婦容・婦功）を教育することにあった。

概して女性に教育は不必要だとする考えが支配的であったが、それでもなお野中兼山の女婉子とか、貝原益軒の妻初子、文才を発揮した歴史家の荒木田麗女、和歌で著名な蓮月尼、俳句で知られる加賀の千代女のような傑出した女性が生まれている⁴¹⁾。

明治期に入ると、指導者は女子教育への配慮の一環として明治4年(1871)に北海道開拓使によって5少女米国留学の実現及び開拓使女学校設立、翌5年(1872)2月には文部省による官立女学校の開設(同年11月に東京女学校と改称)や京都府による新英学校や女紅場(女子手芸の教授施設)の設立をみているが、これらはみな「学制」頒布に先立つ新時代の女子教育を象徴する動きそのものであった。

明治5年の「学制」は、「婦女子」を含むすべての国民に小学就学を奨励するという、それまでの女子教育観を大きく転換させる内容のものとなった。

文部省や地方当局は手を尽して女子就学を督励したが、一般社会で広く女性に要求したものは未来の嫁としての役割であり、さまざまな家庭での家事裁縫や育児といった技術の習得のための教育であった。

かくして地域の要求に応じて独立した女児小学を設立し、女としての^{しつけ}躾や家事裁縫という教育を重視する府県も漸次生まれてきており、こうした動きが男女同一条件、同一教育内容という「学制」が描き出した初等教育の理想を大きく後退させ、やがて文部省は学監デビッド・マレーの献策により賢母教育論の早道としての女子師範学校の設立という政策を講じていくことになっていく。

こうして明治8年(1875)以降、東京や諸府県に女子師範学校が設立されたり、男子師範学校に女子部が付設され、女子教員養成機関が女子中等教育の中核的な役割をも果していくこととなる。

またわが国の女子教育政策が当初、初等教育に重点が置かれていたな

かにあって、キリスト教主義に立脚したミッション（使命）系の私立女子中等教育機関の果たした役割はきわめて大きかった⁴²⁾。

明治10年代に入ると、それまでに昂揚してきた民権運動を封ずる国権主義の考えが為政者の中に生まれ、人心の収攬と秩序の回復をということとで改めて教育指導方針としての儒教主義の教育が復活する。

これを女子中等教育の場合でみると、文部省は明治15年（1882）7月に、一旦廃止（明治10年〈1877〉）されていた官立東京女学校を東京女子師範学校附属高等女学校（修業年限5年）として再出発させ、翌16年（1883）の「通則」で附属高等女学校では「彝倫道德ヲ本トシテ高等ノ普通学科ヲ授ケ優良ナル婦人ヲ養成スル」⁴³⁾（傍点・筆者）とし、かつての東京女学校と比較すると、徳育重視とともに新しい教科として裁縫・礼節・家政が加わり、英語が欠落している点が注目される。

また、「学制」においては男女共学を原則としていたものが、明治12年（1879）9月に制定された「教育令」においては、「凡学校ニ於テハ男女教場ヲ同クスルコトヲ得ス」⁴⁴⁾（第43条）と規定して学校すべての段階で男女共学を禁じていること、但し小学校では共学は妨げなしとしていることも見落すことのできない規定である。

さらに特記しておかなければならない点は、内閣制度創設に伴い伊藤博文内閣が成立したが最初の文相となった森有礼が、以下のように女子教育につき言及し、そこで女子教育の要旨は「良妻」「良母」主義の教育にあると主張していることで、森のこの見解がその後のわが国での女子教育一般に対する良妻賢母主義教育なる指導指針へと発展していったことである。

師範学校ノコトヲ論ズルニ当リ女教員ノコトニ論及セシト雖モ、女子教育ノ要旨ニ於テハ之ヲ述ベザリシユエニ今茲ニ一言スベシ、抑モ教育ノ要旨タルヤ人ヲ薫陶シテ善良ノ人トナスニ在ルコトナレバ、女子教育ノ目的モ畢竟良妻良母ヲ養成スルニアリト云フコトヲ忘ル可カラス。良キ妻トナリ良キ母トナルコトハ完全ノ教育ヲ受クルニ非ザレバ能ハザルナリ、故ニ女子教育ノ要旨ハ良キ母ヲ造ルニ在リト云フ一語ヲ以テ之ヲ包括スト認メテ可ナリ、蓋シ今日ノ女兒ハ他日人ノ母トナルベキモノニシテ、他日ノ児童ハ乃チ今日ノ女兒之ヲ擁養スベキモノナレバ、女子教育ノ事ハ至大至重ニシテ我国ノ

将来ヲ思フモノ須ラク精密ニ女子ノ教育法ヲ考究実行スベキナリ、
教育授業上ニ関シ余ガ郡区長諸君ニ望ム所ノモノ大略前述ノ如シ、
若シ質疑者アラバ遠慮ナク陳述アランコトヲ希望ス⁴⁵⁾

4 出生から第1歌集『みだれ髪』出版まで

欧化の風潮から儒教主義の教育に傾斜していく時代の流れの只中の明治11年(1878)12月7日、与謝野晶子(旧姓・鳳。本名・志よう)は現在の大阪府堺市甲斐町、^{はんかい}阪界電気鉄道軌道阪界線の宿院駅あたりで生まれた。

生家は和菓子商・駿河屋で、明治17年(1884)に宿院小学校に入学、尋常科4年間を修了した明治21年(1888)に堺区堺女学校(現在・大阪府立泉陽高等学校)に入学する。

明治24年(1891)に堺女学校を卒業すると、専ら店の帳簿付けと読書とが晶子の日々の日課となった。

読書内容を見ると、11、2歳より『栄華物語』『大鏡』『増鏡』といった歴史物や、『源氏物語』『狭衣物語』『宇津保物語』などの物語類や随筆『枕草紙』など。さらに17、8歳位になると鎌倉期から江戸期にかけての作品に及び、『万葉集』『古今和歌集』とか、西行・李白・近松門左衛門や井原西鶴の作品にも目を向けている。

その後、東京に遊学していた兄が送ってきてくれた『帝国文学』『しからみ草紙』『史海』『文学界』などで森鷗外・田口鼎軒・樋口一葉・幸田露伴・尾崎紅葉・上田敏などの著述にも興味をもって接し、20歳頃には海外の翻訳文学にまでも読書範囲を拡大している⁴⁶⁾。

このように読書を中心とする独り学びの道をひたすら歩み続けていた晶子の眼はまず身近な両親や雇人から周辺の地域の人々に向かい、彼等にきわめて手厳しい批判を加えていく。「現に私自身なども小さな商家に生れ、父は飲酒家、母は無智、雇人は風儀の悪い者が多く、親戚は吝嗇でなければ強欲、土地は邪智、無趣味、淫蕩の人人に満ちて居た」⁴⁷⁾が、それでなお「兄も私も妹も全く其れに染む所が無く、反対にその不快な境遇から脱することのみを念として成長してきた」⁴⁸⁾(「我子の教育」)と記し、ここに晶子の批判精神の芽生えをうかがい知ることができる。

やがて晶子は与謝野寛(鉄幹)と出会い、彼を激しく恋し、ついに親

を、家を、故郷を捨てて単身上京（明治34年〈1901〉6月）して、寛のものとへと走る。晶子23歳の時であった。

そして同年8月15日には第1歌集『みだれ髪』（歌数399首）が東京新詩社・伊藤文友館より出版され、その後は着実に女流歌人としての地位を固めていく。

なお晶子が与謝野姓を名のり始めたのは翌35年（1902）からで、同年11月1日には長男・光を出産している⁴⁹⁾。

5 人間平等主義の徹底と男女共学制の実現

晶子のつよい願いは、「男と女とが社会に立って協同生活を営む上に価値を対等に認める時代が早く来る様に」⁵⁰⁾ということであった。

それというのも、現実の「日本では女子自身にまだ然う云ふ覚醒が盛でないのですから、当分は大多数の家庭で矢張男の子の教育の方に重きを置き、男尊女卑の旧慣を維持して行くでせうが、其の男の子の教育を大切に思ふ点より見ても、一般の女子教育を漸次に高めて行く必要があると思ふ」⁵¹⁾、つまり当面の課題は、あくまでも理想を高く掲げながらも、女性の覚醒をより促し、一歩でも二歩でもよいから、女子教育の高揚を図り、やがては男女が同じ人間であり、まったく対等であるような日本の社会を築き上げていく努力がいま何よりも私達に必要だと主張する晶子であった。

つまり晶子の女子教育論の出発点は、男子の専制や横行する暴力の否定と良妻・賢母にのみ傾斜している現実の日本の女子教育の在り方に対する激しい憤りが彼女の筆力を高めており、女子も一個の独立した人格を備えた存在であるから当然のこととして男子と平等の教育、すなわち男女共学制の実現を求めており、その考えは終始一貫して繰り返されていく。

男女が人の性の別であつて、人が本然に持つて居る生の本能の質、力、及び尊嚴の差で無いとすれば、人と云ふ語が男女を含んだ一切の人類を平等に意味するものであることは云ふまでも無い⁵²⁾。

晶子の考えはさらにすべての生活領域で男性と対等に関わっていくべきだとする主張にもなっていくのだが、当面はまずもって当時の男女別

学の中高等教育機関、それも不当なまでに男子優位の現状を克服するために、「男女混同」なる中等教育の実現を迫り、最終的には男女共学制を日本の学校教育の全領域にわたって定着させる、つまり一切の教育の機会均等を実現させたいと願う論調へと発展していく⁵³⁾。

それと同時に女性自身の主体的な自己確立のための自覚と自我の覚醒をもつよく訴え、かつ有力な手段としての積極的な「読書」という主体的な自己活動を通じ、広い視野と教養を備えた女性を各自が目指すようにと説く。

すなわち内外の哲学や歴史、政治・経済・法律や社会・文化・教育系の名著（古典）をより広くひもとき、儒教主義という古くさい因襲にとらわれた従属なり服従を強制する道徳的束縛から自らをまずもって解放しなければならないと主張するのである⁵⁴⁾。

Ⅳ 晶子の臨時教育会議「女子教育ニ関スル件」審議・答申の批判

臨時教育会議での特に諮問第6号「女子教育ニ関スル件」に対して晶子はなみなみならぬ関心を持ち、雑誌『太陽』『中央公論』『早稲田文学』や新聞『横浜貿易新報』等に自らの見解を相次ぎ発表している。なかでも彼女の重要な評論は『横浜貿易新報』（大正7年〈1918〉1月27日付）「婦人と家庭」欄掲載の「姑息な学制改革」である。（〔図2〕参照）

（前略）私は此学制改革等を目して「無きには勝る」と云ふ意味で賛成しますが、実に時代遅れの姑息な改革だと考へて居ります。欧州の交戦国が敵も味方も戦後の準備として、戦乱の背後に、既に種々の英断な改造を今から孜々として実行していることを聞くと、我国の朝野の戦後に対する経営と云ふものは殆ど形を為して居ない様に齒がゆく感ぜられます。この戦乱に由つて激震せられた世界の思潮の主なもの、民主主義の普及徹底と、男女平等主義の承認とです。前者は姑く措き、後者の思潮からは婦人参政権の認容が既に着々として欧米の事実となり、併せて教育と労働とに男子と平等の機会を女子に与へることが世界の事実となりつつあります⁵⁵⁾。

[illegible]

第一次世界大戦中に、より確かな世界情勢を客観的に認識し、戦乱の過程で生まれつつある世界の思潮が民主主義の徹底であり、かつ男女平等社会実現に向けての世論の高揚であると、きわめて的確に指摘しており、かかる動向を客観的に受け止めようとしないう朝野の動きの鈍感さに齒がゆい思いをする晶子の姿が浮かび上ってこよう。

まして現在進行している臨時教育会議の洩れ聞く審議内容（議事規則により「会議ハ之ヲ秘密トス」⁵⁶⁾（第6条）とされていた）をみると、「我国の学事改革は此点に少しも顧慮された所が」⁵⁷⁾みられない。これでは「戦後の経営としては全く無理想の改革案だと思ひます」⁵⁸⁾と晶子は断定するとともに、さらにその根拠を確信をもって指摘する。

何となれば、男女を平等に教育して、精神的にも経済的にも平等に生活させようと云ふ理想を全く欠いて居る改革案だからです⁵⁹⁾。

こうして臨時教育会議そのものへの批判からまず入っていく。

臨時教育会議員の顔触は既に私が新年の『太陽』で述べたやうに、世界の思潮を知らず、日本人の生活方針を何う照準して変化させて好いかを知らない、全く時代遅れの人々が多数を占めて居るのです。彼等が男尊女卑の旧思想に^(かほぶれ)囚はれて男子の教育を偏重して居ることは怪しむに足りません。彼等は男子さへ聡明であれば、人間の生活は倫理的にも、智識的にも、生産的にも完全に進歩してゆくものと迷信して居るのです⁶⁰⁾。

さらに多数を占める委員の、低級な教育を女子に与えることで、女子への最大無上の恩恵だとの彼等の考えに猛省を求めていく。

彼等ととも、その妻の無智に久しく苦しめられて居るのですから、女子を全く教育せずには置かうとは勿論考へて居ないのですが、妻を同等の人格者とせず対等の伴侶としない彼等は、唯だ「妻」の名に於て男子の後継者の孵卵器たらしむるに足るだけの低級な教育を女子に施すことを以て、女子に対する最大無上の恩恵だと考へて居るのです⁶¹⁾。

彼等の女性に対する認識のさらなる誤りの指摘と批判とが続く。

これに対して私達婦人が偏頗の沙汰を攻撃すれば、彼等は女子の頭脳の平均量が男子よりも小さくて軽いと云ふ現在の理由と、女子に大思想家や發明家が無いと云ふ過去の理由とを以て、女子の知能は男子よりも決定的に劣等であるとし之を楯に教育上の男女平等主義を拒むのです。

数千年の間、教育を初め有らゆる事柄に自由を持つて發達して来た男子と、反対に思想上は勿論、其外あらゆる行為上の自由を男子から奪はれ低級な労働にばかり偏した畸形な生活を数千年間つゞけて、萎縮に萎縮を重ねて来た女子とを比べて、現在の生理的及び精神的の劣差や、過去の歴史的貴賤の等差を楯に男女の本質の等差と見て論断することは、彼等の如き時代遅れの男子に共通する我儘であると思ひます⁶²⁾

ここにおいて晶子は持論である男女平等教育の必要性和重要性とを説いていく。

私は世の進歩した親達と共に、我我の子供を男の子も女の子も、ひとしく「人」として平等に教育したいと思ひます。其れに適するか否かを試みる事無くして、初めから女子なるが故に男子と異つた、低級であり劣等である教育を課することの残忍を行ふに忍びません。親と教育者とは、女の子が生まれながらにして持つて居る「人」としての平等の權利を侵害すべき何等の理由をも持つて居ない筈です⁶³⁾。

ところが、臨時教育会総会で答申され議決をみた答申はそれぞれに前向きで漸進的な教育改革の数々の点があることは認められるものの、晶子からみれば特に女子教育に関しては徹底した改革からはまったく程遠いものであった。

私は徹底した学制の改革を希望します。これは男女平等主義を基礎として、小学より大学に到るまで一貫して男女共学制を採るもので

無くてはなりません。之は米国のやうな史的情実に拘束されない国柄では既定の事実であり、英仏其他の欧州諸国にても次第に実現されようとしてる制度です⁶⁴)。(傍点・筆者)

晶子の願いはあくまでも男女平等主義に基づく初等教育から高等教育までの一貫した男女共学制の教育の実現であった。

事実、明治初期の日本の学校教育ではすでに考察した如く、男女共学が実行されており、この史実を踏まえて晶子は持論の正当性をねばり強く訴え続けていく。

我国でも明治の中頃までは原則のやうに小学に於て男女の共学を実行して居ました。現に私などは自分の級中に男子の優等生と競争して優勢を示す女生徒の多くあることを目撃しました。私は以前から中学をも男女共学として高等女学校の全廃されることを望んで居るのです。女子が中学の課業に堪へられないやうに思ふのは男子の迷信であることを断言します。^(もと)固より中学の学科に堪へられないやうな男子が多数に有る如く同様の女子も多数に有るでせう。其等の女子は同様の男子と同じく、中学以外の各補修学校へ収容すれば好いのです⁶⁵)。

ここには高等女学校全廃論まで出ているが、晶子の評論は以下のような一文で結びにと導かれている。

男女共学制の結果の良好なことは米国の小学、中学、大学等が立派に証明して居ります。私は戦乱に由つて激成したこの破天荒な時代に、思ひ切つて破天荒な改革を自分の生活に実行する勇気の無い国民は、何時までも世界の文明から落伍せねばならないであらうと心細く思ひます⁶⁶)。

むすび

臨時教育会議で審議・議決された「女子教育ニ関スル件」答申の第1項は、儒教主義に立つ女徳観の再編が唱導されており、新時代にふさわしい「一層体育ヲ励ミ勤勞ヲ尚フノ氣風ヲ振作」という指針を加えつつも、相変わらず従来通りのわが国の家族制度に適った素養、つまり良妻賢母主義の教育の重要性を改めて確認・強化している。

また答申の中核を形成している女子中等教育に関しては、従来の教育内容が教養主義に流れていたものを、より實際生活に結びつけ、經濟觀念（節儉・貯蓄）と家政的な理科教育を基礎とした衛生思想の育成も重視していく方針を打ち出し、家事関連教科の適宜改善を図っているが、その意図はあくまでも「家」制度の維持というきわめて守旧的立場を堅持するものであった。

さらに「勤勞ヲ尚フノ氣風」と第1項で答申しておきながらも実業教育に関しては、その必要性を認めつつも、女子が有職者となることは家族制度を壊す要因となる傾向を助長することから、普通教育に実業科、つまり農村では養蚕・養鶏・蔬菜栽培等につき、商工業地域では商業・工業の理解を深める教科を課す程度にとどめておくといった具合に、有職女性の社会的進出にきわめて消極的である。

まして高等教育に関してはほとんど従来通りで変わりなく、時期尚早と結論づけてしまっているのである。

このような「女子教育」に対する答申であれば、男性と同様に女性も独立した人格を備えた存在であるとして抜本的な学制改革を願い、男女平等主義を基礎として、小学校から大学まで一貫して男女共学制を採るべきであるとする晶子の女子教育論とは余りにも大きな距りがあり、晶子からの手厳しい批判を受けるのは当然の成り行きであった。

晶子は、その後、自らが理想とする女子教育の実現に向けて情熱を傾けていったのは、評論の段階から教育の実践段階へ、つまり西村伊作が大正10年（1921）4月に創設した芸術志向的自由主義教育を標榜した文化学院での教育活動への意欲的な取り組みであったのである⁶⁷⁾。

註

- 1) 『教育史編纂会編修『明治以降教育制度発達史・第5巻』竜吟社・昭和14年, 1191-1192ページ。以下『発達史』と略す。
なお臨時教育会議の意義及び設置の経緯については、「総会（速記録）」をまとめた文部省『資料・臨時教育会議・第1集（総覧）』（昭和54年）・12-16ページ参照。以下『資料』と略す。
- 2) 『発達史・第5巻』, 1193-1194ページ。
- 3) 『資料・第1集』, 24-25ページ。
- 4) 平子恭子『與謝野晶子の教育思想研究』桜楓社・平成2年, 192ページ。
- 5) ここにいう「教育調査会」というのは、大正2年（1913）6月30日、勅令をもって「教育調査会官制」が公布され、文部大臣の監督に属し、教育に関する重要事項を調査審議し、文相の諮問に応じて意見を開申し、また教育に関し建議する機関とされていた。
- 6) 『資料・第1集』, 13-16ページ。
- 7) 委員の名簿及び現職別委員の詳細は『資料・第1集』16-23ページにくわしい。なお最年長は副総裁の久保田と財界委員の莊田が72歳で、最年少は水野直（旧結城藩主・貴族院子爵議員）の40歳であった。
- 8) 『資料・第1集』, 77-81ページ参照。
- 9) 『資料・第1集』, 27-32ページ。
- 10) 仲新・伊藤敏行・共編『日本近代教育小史』福村出版・1985（2刷）, 138ページ。一部訂正。
- 11) 岩波書店編集部編『近代日本総合年表』岩波書店・1968, 232-233ページ参照。
- 12) 『資料・第1集』, 41-49ページ参照。
- 13) 仲新・伊藤敏行・共著, 前掲書, 151-152ページ。
- 14) 『資料・第1集』, 24-25ページ。一部訂正・加筆。
- 15) 『資料・第1集』, 30-31ページ。
- 16) 『臨時教育会議（総会）速記録〈第1-30号〉』のすべては、文部省『資料・臨時教育会議（全5集）』（昭和54年）に収められており、本稿では青山学院大学図書館所蔵のものを使用した。
以下、本節における臨時教育会議第23回総会で審議された発言の引用はすべて同書（『資料・第5集〈第23-30号〉』3-74ページ）からのものである。で、個々の以下の引用の註はすべて省略する。
- 17) 『資料・第5集』, 138ページ。
以下、本節における臨時教育会議第25回総会で審議された発言の引用はすべて同書（『資料・第5集』138-209ページ）からのものである。で、個々の引用の註はすべて省略する。
- 18) ~20) 『定本・與謝野晶子全集・第14巻』講談社・昭和55年, 13-14・16-19ページ。以下『全集』と略す。
- 21) 雑誌『青鞥』の創刊に至るまでの具体的な経緯や平塚らいてうが晶子に創刊号を飾る原稿依頼の様子などは、平塚らいてう『元始、女性は太陽で

あった・上一平塚らいてう自伝』大月書店・1976（第23刷）・288-313ページに詳しい。

- 22) 香内信子『与謝野晶子—昭和期を中心に—』教文堂・1993, 17ページ。
- 23) 与謝野晶子「世界の旅窓より」『全集・第20巻』542ページ。なお『全集』第19・20巻・刊行年は昭和56年である。
- 24) 与謝野晶子「倫敦より」『全集・第20巻』, 955ページ。
- 25) 鈴木正節「与謝野晶子」(芳賀章内編『歴史公論10』雄山閣出版・昭和57年10月), 123ページ。
- 26) 平子恭子編著『年表作家読本・与謝野晶子』河出書房新社・1995, 94-95ページ。以下『年表読本』と略す。
- 27) 香内信子, 前掲書, 18ページ。
- 28) 渡邊澄子『女性作家評伝シリーズ2・与謝野晶子』新典社・平成10年, 116-117ページ。
- 29) 与謝野晶子「鏡心燈語」『全集・第14巻』, 456ページ。
なお、本節での考察に際しては、平子恭子『與謝野晶子の教育思想研究』80-101ページから啓発されたところが多く、学恩に感謝する。
- 30) 与謝野晶子「女子と自由」『全集・第15巻』, 346ページ。
- 31) 与謝野晶子「人の素質」『全集・第19巻』, 220ページ。
- 32)~34) 与謝野晶子「愛は平等, 教育は個別的」『全集・第16巻』, 332, 335ページ。
- 35) 与謝野晶子「個人差と愛」『全集・第18巻』, 358-359ページ。
- 36) 与謝野晶子「我子の教育」『全集・第18巻』, 328ページ。
- 37) 与謝野晶子「多数の青年男女は堅實である」『全集・第20巻』, 276ページ。
- 38)~39) 与謝野晶子「個性を生かすこと」『全集・第19巻』, 236-237ページ。
- 40) 与謝野晶子「女子の活動する領域」『全集・第17巻』, 456ページ。
- 41) 尾形裕康『日本教育通史』早稲田大学出版部・昭和35年, 157-158ページ。
- 42) 影山昇『日本近代教育の歩み—幕末維新期の教育の展開—』学陽書房・昭和56年, 45-48・78-89ページ。
- 43) 『発達史・第2巻』, 293ページ。
- 44) 『発達史・第2巻』, 165ページ。
- 45) 森有礼「九州巡回中郡区長に対する演説」(明治20年2月) 大久保利謙編『森有禮全集・第1巻』宣文堂書店・昭和47年, 502ページ。
- 46) 平子恭子編著『年表読本』, 12, 15, 19, 22-23, 26各ページ。

なお東京遊学の兄(秀太郎・長男, 1872~1931)は帝国大学工科大学を卒業, 大学院進学。専攻は電気工学。東京帝国大学工科大学助教授, 教授を歴任。その間に英・米・独3国にて在外研究に従事。学位(工学博士)論文のテーマは「交流変圧器及多相誘導電気の要部材料の電氣的並に磁氣的密度に関する原理」であった。(同書・15ページ)

- 47)～48) 「我子の教育」『全集・第18巻』, 326ページ。
 49) 平子恭子編著『年表読本』, 36-39, 46-50, 54各ページ。
 50)～51) 与謝野晶子「雑記帳」『全集・第14巻』, 271ページ。
 52) 与謝野晶子「女子と自由」『全集・第15巻』, 343ページ。

なお、わが国における男女共学制に関する史的考察に関しては橋本紀子『男女共学制の史的研究』（大月書店・1992）という労作がある。

- 53) 与謝野晶子「中等教育の男女共学」『全集・第18巻』, 493ページ。
 54) 平子恭子, 前掲書, 220-221ページ参照。
 55) 与謝野晶子「姑息な学制改革」『横浜貿易新報』大正7年1月27日付。
 56) 「臨時教育会議議事規則」『資料・第1集』, 61ページ。

なお本「規則」は、大正6年9月25日に内閣総理大臣決定、同日に臨時教育会議総裁宛通牒。

- 57)～66) 与謝野晶子「姑息な学制改革」前掲『横浜貿易新報』

図3 「横浜貿易新聞」創刊号（明治23年2月1日）



なお『横浜貿易新聞』（日刊）の創刊は明治23年（1890）2月1日。はじめは『横浜貿易新聞』〔図3〕と称したが、『横浜新報』, さらに『貿易新報』, そして明治39年（1906）12月3日に第2000号発行を機会に『横浜貿易新報』と改題された。現在の紙名は『神奈川新聞』である。

また同紙と晶子との関連をみると、晶子は大正5年（1916）から「婦人と家庭」欄に毎週1回の連載を始め、20年間続く。さらに長男・光が大正15年（1926）に慶応義塾大学医学部卒業後、神奈川県保健部勤務となった関連で、晶子には一層横浜が身近な地域となったばかりか、『横浜貿易

新報』社主兼主筆・三宅磐^(ぼん)の後援で「横浜短歌会」を起こし、毎月、夫・鉄幹とともに横浜に来て、作歌の指導や添削、さらには古典の講義を行っており、詠草は『横浜貿易新報』紙上を飾り続けている。—神奈川百科事典刊行会編『神奈川県百科事典』大和書房・1983、901-902ページ。赤塚行雄『与謝野晶子研究・明治の青春』學藝書林・1990、261-262ページ。

- 67) 歌人として著名な深尾須磨子(1888～1974)は「つねづね、ほんとうの教育者とは、大自然のようにそれ自体が感能力を備えた人間ではないか」と思い、その理想像として与謝野晶子を描きつづけてきた」と記し、さらに晶子につき「無限大の大自然の法則を試金石として無限小の自らをみがきぬき、思索と芸術活動に生きぬいてきた」と高い評価を与えている。しかも「実生活では、貧と子沢山の苦勞をみごとに支え、不斷の創作活動をつづけるかたわら、彼女は教育問題その他について多くを書いている」ばかりか、「日本人の生活を芸術的に改造する自由教育の場を計画した西村伊作に同調して文化学院の創立に加わり学監として晩年に至るまで若い世代と心の交流をつづけた」とも記し、教育者としての与謝野晶子を高く評価し最大級の賞讃の言葉を送っている。——朝日新聞社編『朝日選書36・ほんとうの教育者はと問われて』朝日新聞社・1993(第15刷)、25-27ページ。

なお教育実践者としての晶子については、影山昇「西村伊作と与謝野晶子—大正自由教育と文化学院—」(成城大学文芸学部紀要『成城文藝・第171号』2000年6月)を参照されたい。